



Title	リズム単位を利用した発音指導：後ろ向きフットカウントの試み
Author(s)	山下, 好孝
Citation	北海道大学留学生センター紀要, 11, 76-89
Issue Date	2008-03
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/45677
Type	bulletin (article)
File Information	BISC011_010.pdf



[Instructions for use](#)

リズム単位を利用した発音指導

－後ろ向きフットカウントの試み－

山下 好孝

要 旨

現在、日本語教育の発音指導には拍を基本としたものが多い。しかしながらこの拍の感覚を外国人学習者が身につけるにはかなりの困難をともなう。そこで、発音指導で拍ではなくリズム単位（フット）を導入することを試みた。さらに、動詞の発音指導にさいし、フットの区切りを従来の語頭からではなく語末からカウントすることを試みた。

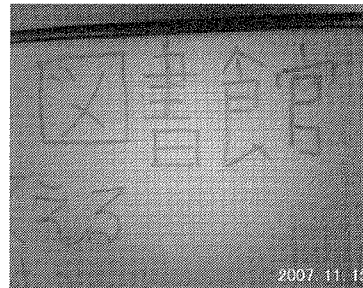
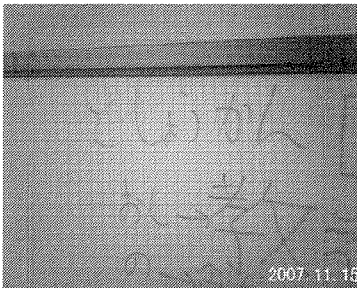
以上のような工夫を通じて、学生のパフォーマンスに向上が見られた。動詞の辞書形、ナイ形、テ形などでアクセントのルールが統一できたため、学生の自立的な発音学習に寄与できた。

〔キーワード〕 フット、拍、リズム、音声指導

1. はじめに

筆者の所属する留学生センターでは初級から上級までの日本語の講義が行われている。先日、ある初級の日本語学習者が使っている教室のホワイトボードに次のように書き込まれているのを発見した。もちろんそのクラスに所属する学生が書いたものである。

(1) 図書館 としょうかん



筆者が今まで目にした同様の誤りとしては次のようなものがある。

- (2) 去年 きょうねん
- (3) 漁業 ぎょうぎょう

なぜこのような間違いを学習者は犯すのであろうか。ひとつ考えられることは「アクセントの核、滝」(以下、アクセントと略称)が単語に存在するとその部分を「長い音節」であると知覚するのではないかということである。一般的に強勢(ストレス)が置かれる音節は、「強さ」だけでなく「高さ」「長さ」においても他の音節から区別される。以下の例では下線部がアクセントの置かれる音節を表すものとする。

- (4) コーヒー こお／ひい
- (5) 中学 ちゅう／が／く

上にあげた間違いを犯している学習者は、アクセントのある音節が長いと感じたため、それを「ふりがな」に反映させたと考えられる。

筆者は従来日本語音声教育において「アクセント」の重要性について学生たちに強調してきた。そしてアクセント規則を説明し、練習も繰り返してきた。それにもかかわらず、以下のような学生たちの不適切な発音にしばしば遭遇する。

- (6) 食べない たべない
- (7) 食べても たべても

発音矯正してもこのような例にでくわすということは、やはりその指導法に問題があるのではないかと考えられる。筆者は従来アクセントの説明を「拍」の概念に基づいて行ってきた。しかし日本語を母語としない学習者には「拍」という単位はなかなか身につかない。そこで新たな発音指導の単位として「リズム」を導入することにした。この報告では筆者が行った「リズム単位を利用した発音指導」の概要と、その成果についてまとめる。

2. 発音指導における「単位」

現在、日本語教育における発音指導は、主に「拍」(mora)を基本的な単位として行われている。

たとえば「食べる」という動詞は2拍目にアクセントがある中高型の単語であると説明される。しかしこの拍という単位は外国人学習者にとって知覚しにくいものである。なぜなら、拍という概念は音声的なものというよりは音韻的な単位であり、日本語母語話者は単に「各拍は同じ長さを持つ」と見なしているにすぎない。たとえば「高校(こうこう)」という単語を取り上げてみる。この単語は発音上「こう／こう」と2音節に分けられる。拍の観点からは第1音節も第2音節も同じ長さを持つはずである。しかし、実際の発音を聞いてみると第1音節のほうが長い。また「先生(せんせい)」という単語も、方言によっては「せん／せ」というふうに分かれ、第1音節の方が長くなっている。

拍という単位はアクセント付与規則などの説明には不可欠なものではあるが実際の発音練習を拍を基準にして行うとうまくいかない場合が多い。たとえば、中国人学習者に動詞の「ナイ形」を指導するとしよう。そのさい、辞書形でアクセントのある動詞では、ナイ形になった場合、後ろから3番目の拍にアクセントが落ちると説明することになる。

- (8) 食べる → 食べない (たべない)
- (9) 話す → 話さない (はなさない)

そして辞書形でアクセントを持たない動詞では、ナイ形でもアクセントを持たないと説明する。

- (10) 聞く → 聞かない (きかない)
- (11) 変える → 変えない (かえない)

しかし、多くの中国語母語話者の発音では

- (12) 食べる → 食べない (たべない)
- (13) 話す → 話さない (はなさない)
- (14) 聞く → 聞かない (きかない)

(15) 変える → 変えない (かえない)

というふう後ろからの2番目の拍「な」にアクセントを置いてしまう。これはこの拍を含む音節が「二重母音」を形成しており、アクセントを置きやすくなっているからではないかと考えられる。二重母音を含む音節は長い音節である。上に述べたように長い音節は、強勢（ストレス）、アクセント（高低の変化）を伴いやすいのである。

そこで拍に代わって2拍のまとまりであるフット（foot）を発音練習のさいの基本単位に採用することにした。以下フットの形成の仕方を述べる。

3. フットと長音節・単音節

日本語では2拍がいつも一緒になってリズムを形成すると言われる。この単位をフット foot と呼ぶ。ただし、この用語はあまりなじみがないものであるため筆者は日本語教育の現場では「リズム単位 rhythm unit」と呼ぶことにしている。

2拍を一つのリズム単位にして発音指導を行うことは従来から様々な日本語教育の現場でなされてきている。それが教材化されたものとして土岐・村田（1989）がある。同書では日本語の音節を長音節と短音節に分けることから説明を始めている。通常、長音節は2拍、単音節は1拍から成る。

日本語の長音節は次のようなものである。以下、点線部は該当部分を示す。

A) 長母音 long vowel のある音節

- | | | |
|---------|-------|------------------|
| 1) お父さん | おとうさん | お／ <u>とう</u> ／さん |
| 2) 先生 | せんせい | せん／ <u>せい</u> |
| 3) 大きい | おおきい | <u>おお</u> ／きい |

B) 二重母音 diphthong のある音節

- | | | |
|---------|------|-------------------------|
| 4) 会社 | かいしゃ | <u>かい</u> ／しゃ |
| 5) 食べない | たべない | た／ <u>べ</u> ／ <u>ない</u> |
| 6) 返す | かえす | <u>かえ</u> ／す |

C) 促音「っ」のある音節

- | | | |
|-------|------|---------------|
| 7) 学校 | がっこう | <u>がっ</u> ／こう |
|-------|------|---------------|

8) 北海道 ほっかいどう ほっ／かい／どう

9) 切った きった き／た

D) 撥音「ん」のある音節

10) 今晚は こんばんは こん／ばん／は

11) 連絡 れんらく れん／らく

12) パン屋 ぱんや ぱん／や

以上は2拍で1音節が形成される場合であった。しかし、3拍で1音節が形成される場合もある。

E) A+C

13) 通った とおった と／お／た

F) A+D

14) コーン こおん こ／おん

G) B+C

15) 帰った かえった か／え／た

項目(B)の二重母音に関しては、もうすこし詳しく見ておく必要がある。

日本語の母音を開口度の大きい「あ、え、お」と開口度の小さい「い、う」に分ける。前者を開母音、後者を閉母音と称す。日本語の場合、開母音+閉母音の組み合わせで二重母音を形成すると見なすことができる。

(16) あ+い 愛 あい

(17) あ+う 買う かう

(18) お+う 負う おう

(19) お+い 甥 おい

閉母音+開母音の組み合わせは、二重母音とは見なさず単母音の連続と見なす。

(20) い+え 家 い／え

- (21) う+お 魚 う／お
(22) い+あ ピアノ ぴ／あ／の

時には開母音+開母音、閉母音+閉母音の組み合わせでも二重母音とみなせる場合もある。上記の例では「帰る」がそれに該当する。

- (23) あ+え 帰る かえ／る
(24) あ+お 青 あお
(25) う+い 悔い くい

ただしこの場合は先行する母音にアクセントがあるときに限られるようだ。たとえば「青い あおい（下線部はアクセントを示す）」という形容詞を音節に区切ってみる。

- (26) あお／い

と区切るより

- (27) あ／おい

と区切った方が自然に発音できる。

また「直江津 なおえつ」という地名も

- (28) なお／え／つ

とか

- (29) な／おえ／つ

というふうには音節分けするより

- (30) な／お／え／つ

48) 食べる 調べる 話す

従来の区切り：タベ・ル シラ・ベル ハナ・ス
新提案 : タ・ベル シラ・ベル ハ・ナス

ナイ形

従来の区切り：タベ・ナイ シラ・ベ・ナイ ハナ・サ・ナイ
新提案 : タベ・ナイ シ・ラベ・ナイ ハ・ナサ・ナイ

テ形

従来の区切り：タベ・テ シラ・ベテ ハナ・シテ
新提案 : タ・ベテ シラ・ベテ ハナ・シテ

イ形容詞に関しては次のようになる。

49) ない ない ない
50) 濃い こい こい
51) 熱い あつい あ つい
52) 悲しい かなしい かな しい
53) 黄色い きいろい きい ろい
54) めんどくさい めんどくさい めん どく さい

このようにしてみると、動詞、イ形容詞のアクセントが最終フットに置かれることが理解しやすくなる。動詞、形容詞の形態的特徴が語末にあることはいろいろな言語でも観察できることである。語末からフットを区切ることによって日本語でもそれが意識できるようになる。

もちろん上記の特徴に関して例外も存在する。まず動詞では二重母音や長母音を語基に含むグループが当てはまる。

55) 帰る かえる かえ る
56) 返す かえす かえ す
57) 通る とおる とお る
58) 申す もうす もう す

- 59) 入る はいる はい る
 60) 考える かんがえる かん がえ る

形容詞ではその形成において動詞起源であるものが該当する。

- 61) 詰まらない つまらない つ まら ない
 62) 有り得ない ありえない あ りえ ない

これらの例外項目はあるものの、学習者に用言のリズムの感覚をつかみやすくさせることができる。実際、このような区切る練習をさせてみると、学習者のいわゆる「特殊拍（促音、撥音、長音）」に対する意識が高まった。

5. 動詞の変化形での練習の実際

従来、筆者は動詞の変化形を50音図に基づいて行ってきた。利用するのは凡人社の五十音図である。この図に基づいた指導は五段動詞の形態を把握させるのに有効であった。

	W	R	Y	M	P	B	H	N	D	T	Z	S	G	K	
あ	わ	ら	や	ま	ば	ば	は	な	た	た	ぜ	さ	が	か	あ
い	わ	ら	や	ま	ば	ば	は	な	た	た	ぜ	さ	が	か	あ
え	い	り		み	び	び	び	に	ち	ち	し	し	ぎ	き	い
う	い	り		み	び	び	び	に	ち	ち	し	し	ぎ	き	い
う	る	ゆ	む	ぶ	ぶ	ぶ	ぬ	づ	つ	ず	す	く	く	う	
え	れ		め	べ	べ	べ	へ	ね	て	て	せ	せ	げ	け	え
を	ろ	よ	も	ほ	ほ	ほ	の	ど	と	そ	そ	こ	こ	お	
							ん								

五十音図表

しかし、学習者は単音の部分に学習意識を集中させる、アクセントの部分の習得が不完全であった。そのため「笑う わらう」というアクセントのない動詞のナイ形を作らせたとき

- 63) わらわない わらわない わらわない

などというアクセント形式で学生が発音することがしばしばあった。

そこで動詞に関し、「辞書形」「ない形」「て形」形を基本形としてリズム単位に区切らせる練習を行った。この場合、口頭で行うより原稿用紙にひらがなで書かせることから始めた。

名詞の場合は漢字一つが1フットにまとまることが多い。動詞の場合は漢字が現れても訓読みが基本であるため、ひらがなで表記したほうがリズムの区切りとしてのフットが分かりやすくなる。

辞書形

- | | | | | |
|------|-----|-----|---|------------|
| (64) | 話す | はなす | は | <u>な</u> す |
| (65) | 泳ぐ | およぐ | お | <u>よ</u> ぐ |
| (66) | 切る | きる | | <u>き</u> る |
| (67) | 起きる | おきる | お | <u>き</u> る |
| (68) | 終わる | おわる | お | わ <u>る</u> |
| (69) | 寝る | ねる | | ね <u>る</u> |

ナイ形

- | | | | | | |
|------|-------|-------|---|------------|-----------|
| (70) | 話さない | はなさない | は | <u>な</u> さ | ない |
| (71) | 泳がない | およがない | お | <u>よ</u> が | ない |
| (72) | 切らない | きらない | | <u>き</u> ら | ない |
| (73) | 起きない | おきない | お | <u>き</u> | ない |
| (74) | 終わらない | おわらない | お | わ <u>ら</u> | ない |
| (75) | 寝ない | ねない | | ね | <u>ない</u> |

テ形

- | | | | | | |
|------|-----|------|------------|------------|---|
| (76) | 話して | はなして | は <u>な</u> | して | |
| | | | SS | SS | |
| (77) | 泳いで | およいで | お | <u>よ</u> い | で |
| | | | S | L | S |
| (78) | 切って | きって | | <u>き</u> っ | て |
| | | | | L | S |

(79) 起きて おきて $\frac{\text{お}}{\text{S}}$ きて SS

(80) 終わって おわって お わっ て
S L S

(81) 寝て ねて ねて
SS

このような区切りを学生にさせることには二つの意味がある。一つはテ形などに見られる音便化の意味である。音便というのは元々単音節が2つ生起していたものが長音節一つに変化し、動詞の語幹と語尾が融合したものであると考えられる。イ音便、促音便、撥音便により長音節が生まれ、長音節は語幹と語尾を貼り付ける「膠」の役割を果たす。フットに分割するさい、その「膠」の部分は分割できないのである。

もう一つは、フットによるリズム単位に区切ったとき、アクセントの落ちるフットが自ずと明らかになる。このように分割することで辞書形、ナイ形、テ形などでアクセントのルールが統一化できる。つまり辞書形では最終フットに、ナイ形、テ形では最後から二つめのフットにアクセントが落ちるのである。もちろん辞書形でアクセントのない動詞に関しては、ナイ形、テ形になってもアクセントを有さない。

従来の「テ形」形成規則では学生の知覚しづらい拍をつかって説明していた。それに基づいて説明すると、辞書形でアクセントのある動詞の場合、後ろから2番目の拍にアクセントが落ちる。それらがテ形になった場合、五段動詞では辞書形と同じ拍がアクセントを担うが、一段動詞ではその一つ前の拍にアクセントが移動する。

(82) 話す はなす はなして

(83) 食べる たべる たべて

このように従来の説明では、ルールが複雑化していた。

一方、フットで分けた場合には、アクセント位置の規則は単純化できる。

- (84) アクセントを持つ動詞の辞書形の場合：
アクセントは最終フットの第1音節（例外（55-60））
- (85) アクセントを持つ動詞のテ形の場合：
アクセントは最終フットの直前の音節

このようにルールが簡素化することで、学習者の自立的な発音練習が容易になる。

6. 最後に

今回紹介した指導法を筆者が担当する日本語科目の3つのクラスで導入した。レベルは初中級から上級の学習者である。最初に、単音節Sと長音節Lを紹介し、なじみのある名詞を使ってユニットに分ける練習をさせた。口頭で行う前に、使用しているテキストの紙の上で分割させた。

つぎに動詞、形容詞の場合に後ろからユニットをまとめる練習をさせた。この場合は、まず原稿用紙を配布し、そこにディクテーションで動詞の辞書形を書かせることからスタートした。原稿用紙を利用することで最終的に拍の概念が捕まえやすくなったと思われる。辞書形を15～20個書き取らせた後は、レベルに応じて、「ナイ形」「テ形」「タ形」「タラ形」「テモ形」「バ形（已然形）」「受身形」「使役形」「使役受身形」など書き込ませた。書き込んだ諸形式を今度はフットに分けさせる。斜線「/」で分けても「[^]」等の記号でユニット単位にまとめてもよい。

最終的には、口頭でユニットに区切って発音させる。アクセントのチェックもユニット単位で行う。その結果、最初にあげた(6)のような不自然な発音は激減した。

今後はこの実践報告を発展させ、客観的なデータを記録し、研究発表につなげていきたいと思う。

参考文献：

- 日本語教育学会（2005）『新版日本語教育事典』大修館書店
土岐 哲・村田水恵（1989）『発音・聴解』荒竹出版
松崎千香子（2006）「中国語母語話者の促音の発音に与えるリズム指導の効果」、甲南国文53（2006/3）
<http://www.konan-wu.ac.jp/~nichibun/kokubun2006/matsuzaki2006.pdf>

やました よしたか（留学生センター教授）

The foot as a unit for Japanese pronunciation practice – A new approach to backward foot counting –

YAMASHITA Yoshitaka

Traditionally Japanese pronunciation practice is based on the “mora” as the basic phonetic unit. The explanation of Japanese accent rules also makes use of the mora. But the concept of mora is difficult for foreign learners to perceive. And, of course, they don't put the accent on the proper position in Japanese words.

In this report I propose the use of the foot as a unit for pronunciation practice.

A foot is made of two morae. Sometimes two morae make one long syllable, and one long syllable composes a foot. On the other hand, one mora can make a short syllable, and two short syllables make a foot

In my Japanese classes I introduced foot-dividing exercises both in written and oral practice. I also introduced backward foot-counting in the case of verbs and adjectives.

This new method has proved to be effective among intermediate and upper level Japanese learners. They pay more attention to special morae such as ONBIN combinations. Based on foot-dividing it is much easier for them to put the accent on the proper position in a word, because the accent rule is very simple if the unit is a foot.